

# 芥川龍之介「十円札」論

—— 芸術をめぐる虚構と嘘 ——

はじめに

芥川龍之介作品「十円札」は、一九二四（大正一三）年九月一日発行の『改造』第六卷第九号（「秋季特別号」）に掲載されたものである。この作品は、作家兼教師・堀川保吉を主人公とした所謂「保吉もの」と称されるシリーズの一篇であるが、その中で唯一、生前の単行本には収められていない。本作以前のもは全て『黄雀風』<sup>1</sup>所収、以後の作「早春」<sup>2</sup>は『大導寺信輔の半生』<sup>3</sup>所収である。

「保吉もの」は従来、芥川が歴史小説を中心とする作風から現代小説へと移行していく過渡期の作品群として語られることや、主人公である保吉を、創作の傍ら海軍機関学校の英語教師を務めた作家・芥川自身と捉え、私小説の一種と見做されることが多く、個々の作品について論じられることは極めて稀である。「十円札」においては、大西永昭氏の「十円札」と作家の（威厳）——芥川龍之介「十円札」試論——<sup>3</sup>を挙げるに止まり、作品が未だ独立した一小説として評価を加えられていないことが伺えよう。掲載時期についても、全十作品のうち八作品がこの

作品と同年もしくは前年に集中していることから、シリーズものとしての印象が強くなることは避け難い。

しかしながら、各作品には日常体験を通じた保吉の思考の変遷が描かれており、個々の作品を深く考察することで、作品群として捉え直した際に、これまでとは異なる評価軸が浮かび上がるのではないかと考えた。本論では作品研究の可能性を広げるべく、独自の解釈を試みたい。

## 物売り

保吉はプラットホームで通勤列車を待ちながら、ポケットの中に六十何銭しかないことを不愉快に思っていた。日々の生活には事足りるが、保吉が思い描く作家的な生活を送るためには、一週に一度は東京へ行かねばならないからだ。給料日を二週間後に控え、あらゆる金策を講じても日曜日に東京へ出かける資金は集まらない。

保吉は気を紛らすために巻煙草を燻らせようと、物売りに「朝日をくれ給へ。」と声を掛ける。だが、横柄な態度で新聞か煙草かと問い返されたことに苛立ちを覚え、「ビイル！」と言い放って、物売りを一蹴

田 沼 伊都子

する。

保吉は元より、「我々の生命を阻害する否定的精神の象徴」として、物売りを目の敵にしていた。「我々」とは恐らく彼を含む芸術家全般のことであり、実生活に即さない空想の世界を売る彼らと、実生活に必要な品物を提供する物売りが相容れないことを表している。保吉は芸術家として、実生活に必要な物よりも豊かな物を売っているという自負があり、物質が全てとばかりに居丈高な態度で生活用品を売る物売りに、強い反発心を抱いているのである。この日は殊に虫の居所が悪かったこともあり、自身の言葉が伝わらなかったことに怒りを覚え、聊か大人気ない態度で物売りを困らせて、あたかも戦に勝利したかのような気分浸っているのである。

この作品は他の「保吉もの」同様、作中で展開される出来事を、数年後から俯瞰するという構図で描かれており、視点人物は時に身勝手な保吉の振舞いにも、批評的な冷静さを保ち続けている。ここでも保吉が狼狽する物売りを見て、ハバナを吸うよりも愉快だと溜飲を下げつつブラットホームを歩いていく様を、「丁度ワグラムの一戦に大勝を博したナポレオンのやう」であると描写している。無自覚ながらも、物売りを遣り込めてあたかも芸術が実生活に勝利したかのように得意になっている保吉をナポレオンに譬えることで、その独りよがりな滑稽さを一層強調しているのである。

## 窮乏

保吉は降車後、悲劇とは地獄の業苦を受けることなく、業苦を業苦と感ぜずにいることだと、歩きながら考える。そして週に一度の東京行

きは、その悲劇の外へ「躍り出す」ための行為であるとし、六十何銭しか持たぬ今では、それすらも叶わぬことを嘆いている。

するとそこに主席教官の栗野先生がやって来て、彼の娘が昨日退院したばかりだと知る。語学的天才たる栗野先生には保吉も一目置いており、英語の教科書に難解の箇所を発見する度、あるいは辞書を引くのが億劫な時に教えを請う相手である。だが保吉はその語学的天才よりも、無造作に解決できる簡単な質問にも、一思案を装ってから答える偽善者の態度に尊敬を払っている。上下関係を好まず、教える側として優位に立つことで相手のプライドを傷つけることのないよう、下手な芝居を打つ彼の優しさを評価しているのである。

栗野先生は保吉に、相変わらず日曜毎に東京に出かけているのかと尋ねる。保吉は、貧困のため明日は東京行きを断念したと伝える。栗野先生は、保吉が月給の他にも莫大な原稿料を得ていると思っていたため驚きを隠せない。すると保吉は忽ち熱心に、売文に糊口することの困難さを弁じ出す。保吉は生来の「詩的情熱」により、意識的に誇張した売文の悲劇に一人感激し、平生の瘦せ我慢も忘れ、手持ちが六十何銭しかないことを得意げに吹聴するのである。

## 借金

保吉は教官室の机で、東京へ行きたさに業を煮やし再びポケットの底の六十何銭かを憂鬱に考え始めた。教官室には栗野先生と自分しかない。保吉はふと巻煙草を思い出すが、物売りとの一悶着の末、買わずに立ち去ったために喫煙も儘ならない。保吉は己のプライドを保つための言動により、ほんの一時「ハヴァナを吸ったのよりも愉快」な気分を味

わったものの、結局は自身の首を絞める事態を招いてしまったのである。

東京行きを断念せざるを得ないことについては、「衣食の計に追われる窮民」に比べれば贅沢な悩みではあるが、「苦痛そのもの」は窮民と同等である。「窮民よりも鋭い神経」を持つ保吉にとって、六十何銭の小遣いは耐え難い。窮民でなくとも、絵画や音楽、文学等に頗る冷淡な栗野先生などにとっては、芸術のないことは何の痛手にもならないが、作家・堀川保吉にとっては精神的飢渴の苦痛を与えるというのである。

するとその時、栗野先生が「女人の嬌羞に近い間の悪さ」で、突然保吉の目の前にやって来る。栗野先生は照れ隠しに微笑しながら、四つ折にした十円札を、東京行きの汽車賃にと差し出した。だが娘が退院したばかりの栗野先生自身にも、金銭に余裕があるとは考えにくい。栗野先生から無心するつもりではなかった保吉は、今朝方大袈裟に売文の悲劇を弁じた自身の振舞いに恥じ入り、東京へは行かないことにしていると断る。栗野先生はそれでも、無いよりはましだからと紙幣を手渡そうとするが、保吉が再度断ったため、ポケットに戻して退却する。

思いがけない出来事に動揺し、咄嗟に申し出を断った保吉だが、その後落ち着きを取り戻すと、栗野先生の好意を無にしたことを気の毒に思う。生真面目な栗野先生は、保吉がその作家的性格から話を誇張してしまったことに気づかず、全てを真実として受け止めているのである。金銭の貸し借りには、貸す側と借りる側に自ずと上下関係が発生する。先述の通り、栗野先生は上下関係を嫌い、極力自身を人より上の立場に置かないよう、常日頃心がけている人物である。その栗野先生が、本来ならば最も避けたいであろう貸す側——上の立場をあえて引き受けてまで、保吉を助けようとしてくれたのだ。

平生作家は作り話を生活の糧としているが、それはあくまで実生活とは切り離された、誌面上でのことである。だがここで保吉は、迂闊にも日常生活に芸術世界を持ち込み、フィクションではなく実体験として語ってしまう。

ここで話を膨らませてしまったことを素直に告白すれば、全て円く収まるはずだが、保吉自身はそれを何としても避けたいと考えている。保吉は「一週に一度づつは必ず東京へ行かなければならぬ。」という件からも分かるのとおり、芸術世界を社会とは別次元の崇高なものと捉えているが、芸術世界では許されている「詩的情熱」も、日常生活に持ち込んだ途端に、単なる嘘に還元されてしまう。自身の窮乏を大袈裟な作り話と認めることは、芸術が嘘をついたと認めることにも繋がるからだ。

この「詩的情熱」による作り話を嘘にしないためには、先に訴えた自身の窮乏が、あたかも事実であるように振舞わねばならない。保吉は十分ばかり逡巡した後、殆ど喧嘩を吹っかけるように昂然と栗野先生のところへ行き、さっきのお金を拝借したいと申し出た。栗野先生は保吉の言葉を受けると無言で立ち上がり、四つ折に折られた十円札を、「それ自身嬌羞を帯びたやうに」おずおずと右手の指で差し出すのであった。

### 威厳

思いがけず栗野先生から十円札を借り受けることになった保吉だが、彼にとって給料日まで二週間以上借金を返さないことは、乞食同然のこととして受け入れ難く、この十円札を未使用のまま明後日の月曜日に返そうと考えている。とはいえ二週間程度先の給料日に借金を返済することは、そこまで不義理な行いとも思われない。日頃から「原稿料の前借

などはいくらたまつても平気」だと考えている保吉が、この借金だけは何としてもすぐに返済するという固い決意を抱いたのは、栗野先生に対し「威厳」を保ちたいとの思いがあるからに他ならない。

保吉は栗野先生の語学的才能を認める一方で、芸術的素養には乏しい人物と見做しているため、作家として傑作を完成させることによって、彼に威厳を保つことはできないと考えている。と同時に語学的天才を前に、語学的素養を示すことで威厳を保つこともまた無理な話である。然るに「社会人たる威厳」を保つためにこの十円札を使わずに返すというのである。

保吉がすぐに返済することに拘っている理由は、自身が「詩的情熱」ゆえに窮乏を誇張したために、図らずも芸術を理解しない栗野先生を騙す形で金を借りてしまったことにある。彼は保吉を支援するために十円札を差し出した。これに甘えるならば、それはパトロンの援助によって成り立つ芸術ともいえるのだが、発端として嘘が存在するために、自身の行いを正当化できないのである。とはいえ借りずに済ませては栗野先生の善意を無にすることになり、嘘を肯定することにも繋がる。彼の善意を傷つけることなく、また芸術が嘘の塊であると認めないためにも、一旦は金を借りなければならぬのである。芸術は虚構だが、単なる嘘に貶めてはいけないという保吉なりの倫理観がここに垣間見える。

だが誇張した作り話を実践すべく、その金を東京行きに使うならば、それは酷い嘘を重ねることに他ならない。前述の通り「詩的情熱」によって膨らませた話も、日常生活の次元では単なる嘘に過ぎないので、栗野先生を騙して引き出した金を芸術に託けて自身のために使うことは道義に反する。この十円札は、借りなければいけない金であると同時に、借りてはいけない金なのである。金銭の貸借によって生じる上下関

係に組み入れられなくてはならぬ、金を借りないこと＝他人の世話にならないことである。保吉が栗野先生に「社会的威厳を保つ」ためには、形式上借りたこの金を、使わずにそのまま返さねばならないのである。

その後保吉は、汽車に揺られながら本郷のある雑誌社の依頼を思い出す。多少の前借ができそうなのはこの一軒だけだが、元よりこの雑誌社の雑誌を軽蔑していた保吉としては、金のために自身の信条に反する文章を書くという身売り同然の行為に嫌悪感を覚える。とはいえ芸術家の享楽は自己発展の機会である。このまま東京まで乗り越せば、食事や音楽会、そして買物などができ、十円札を保存せずに済む。だが、万一前借のできなかった時には——保吉はここで、君子人だが芸術的感性を持ち合わせない栗野先生のために、自己発展の機会を失うべきなのか、そもそも何のために栗野先生に威厳を保ちたいのかと自問する。

しかしながら、保吉はこの論理の危うさに気づき踏み止まる。保吉としては、芸術とは虚構ではあるが嘘ではないという自負心を抱いているため、栗野先生を騙して借りた金によって、その芸術が成り立つという事態は受け入れ難い。意に添わぬ執筆依頼を受けることもまた、信念に基かない嘘を芸術として金に換えることに繋がるため、思い直したのである。この件からは、実社会とは異なる点や多少の誇張はありつつも、芸術とは嘘や出鱈目ではないのだという、保吉の作家としての思いが汲み取れる。保吉は、栗野先生に「社会人たる威厳」を保つことこそが、芸術家としての矜持を保つことにも繋がると考えたのである。

保吉が考え込んでいる間にトンネルを通り抜けた汽車は、苦しうに煙を吹きかけながら、雨交じりの風に戦ぎ渡った青芒の山峡を走り続けている。この汽車がトンネル（暗闇）を潜り抜ける描写には、保吉が一瞬間享楽の側に揺らぎ、陥穽（売文）に落ちかける不安定な心情が暗示



されている。作家としての矜持から、輕蔑する雑誌社からの仕事は引き受けないことに決め、東京行きを思い止まったものの、芸術と享樂の狭間で揺れる作家・堀川保吉の逡巡が、苦しうに走る汽車の様子から読み取れる。また汽車が山峡を走り抜けている点や、保吉の思索の最中トンネルからトンネルへと出入りしている点などは、汽車の音が思い巡らせる保吉の描写を挟みこんでいる「お時儀」の構造と共通していることも指摘しておきたい。

### 落書き

翌日の日曜日の夕暮れ、保吉は下宿で悠々と巻煙草を燻らせていた。彼は三つの幸福を手にして、満足の情に溢れているのである。一つは借りた十円札の保存に成功したことである。保吉は結局東京行きを思い止まったため、栗野先生への威厳を保つべく、明日にも十円札の返済が可能なのである。二つ目は、思いがけずある書肆から著書の印税が入ったことである。そして最も意外だった三つ目は、下宿の晩飯に塩焼きの鮎が一尾付いていたことである。保吉は膝の上で夕明かりに照らされている十円札をしみじみと満足気に鑑賞し、具に意匠を眺めながらその美しさを称え、手垢さえなければこのまま額縁に入れてもいいとさえ思う。保吉はここで、紙幣の裏側に手垢以外にも細かいインクの落書きを見つける。彼は静かに十円札を取り上げ、口の中で読み下した。

#### 「ヤスケニシヨウカ」

この十円札は落書きの作者に、ただ鮎にするかどうか迷わせただけに過ぎなかったであろうが、広い世の中にはこの一枚の十円札のために悲劇の起こったこともあるかもしれない。保吉自身もまた、昨日の午後

はこの一枚の十円札の上に魂を賭けていた。だが今日を以って栗野先生に威厳を全うできると確定し、尚且つ月給日までの小遣いに十分な印税も手に入ったのである。

#### 「ヤスケニシヨウカ」

保吉はこう呟いたまま、丁度昨日踏破したアルプスを見返るナポレオンのように、再びしみじみと十円札を眺めるのだった。

保吉は、前日には東京に行かない苛立ちを物売りにまで八つ当たりしていたものの、結局この日は借りた十円札を保存するため終日家で過ごし、その心情への言及もない。芸術のためには何としても毎週東京へ行くべきと考え、友人との会食や音楽会、果ては画材の購入など、自身の思い描く理想の芸術家の生活の実践に強い拘りを示していたはずの保吉であったが、この日出かけられなかったことによって、苦悩や煩悶する様子は見られない。畢竟、保吉が考えた理想の芸術家の生活の中には、真に必要なものまで含まれ、私的欲望を満たすための言い訳として芸術の名を借りていた可能性も否定できない。

そして注目すべきは、二百五十円の印税収入が得られたことである。この印税により、保吉は十円札の保存に対するプレッシャーから解放された上、月給日までに十分な小遣いも確保できたのである。その上、下宿の晩飯に鮎の塩焼きがつくという思いがけない幸福も重なったことで、保吉の心は満足の情に溢れかえる。

彼は十円札を眺めながら、かつてこの紙幣によって齎されたかもしれない悲劇——昨日までは自身をも脅かした悲劇——は今や霧散したものと、ナポレオンのように余裕綽々としている。一見すると大団円のように物語は幕を閉じるが、十円札の保存に成功した保吉は、肝心な点を見落としている。この紙幣はただの十円札ではないのだ。「ヤスケニシヨ

ウカ」という文字が書かれた、特定可能な紙幣なのである。栗野先生がこの紙幣の特徴を覚えていたか否かは作中に描かれていないが、貸した金が使われずに返されたことに気づく可能性もある。

栗野先生は保吉が東京に行き、芸術家的生活を享受するための資金として十円札を差し出したのである。この金を借りる目的とは、一旦は諦めた東京行きを執行することに他ならない。栗野先生の好意を無にすることや、芸術を嘘に貶めることを否定したい一心で形式的に金を借りた保吉だが、その結果、更なる悲劇の火種を自ら作るという皮肉な事態を招いてしまっていることに、当の保吉は気づいていないのである。

だがここで二つ目の満足として挙げられた印税収入が、この不安要素の存在を有耶無耶にしてしまう。保吉は当初、借りた十円札をそのまま返すつもりであり、必然的に落書きのある十円札を返すことになるため、栗野先生に未使用だと気づかれる可能性は高い。ところが印税収入を得たことで、そちらの紙幣から十円札を返済する可能性も生じるため、栗野先生から借りた落書きのある十円札をそのまま返す確率は下がる。もし仮に落書きのある十円札を返し、そのことに気づかれたとしても、印税が入ったから使わずに済んだと説明することもできるのである。

この物語は先述の通り、語り部となる視点人物が、数年後の世界から作中の出来事を回想する構成となっている。つまり視点人物は、翌日の保吉と栗野先生のやりとりを知っているのである。だがその顛末が描かれることはなく、結末を投げ出したまま物語は幕切れとなる。

## おわりに

この作品では、自身が思い描く作家的な生活を味わうために、週に一度東京へ通う資金が不足したことを契機に、図らずも栗野先生から十円札を借りることになった保吉が、「社会人たる威厳」を保とうと苦悩する姿が描かれている。そしてその解決策として考え出された「十円札の保存」の是非は、印税収入を得たことで宙に浮いてしまう。だが保吉自身は無自覚ながらも、その解決法には栗野先生を傷つける危うさが秘められており、全てが円く収まるかのようにありながらも、実際には不安要素が解消されたわけではない。語り手がこの事実を読者に仄めかしたところで、物語は幕を閉じるのである。

保吉は冒頭で、煙草の「朝日」を買おうとしたところ、物売りに横柄な態度で煙草が新聞かと聞き返されたことに立腹し、「ビール！」と答えて相手を困惑させ、その場を後にする。通勤時間帯に咄嗟にビールと言いつつ発想からは、一般人と芸術家の違いが透けて見える。作家・堀川保吉の言葉が満足に伝わらなかったのはここだけではない。窮乏を訴えた際にも、栗野先生には「詩的情熱」による誇張が理解されず、却って同情されて金を借りる羽目になってしまっているのである。

保吉は芸術家的生活のためならば、意に添わぬ雑誌社の仕事も引き受けようと一旦は考えながらも、既のところでは思い止まる。芸術に名を借りた嘘を金に換えることは、芸術を貶めることに繋がるからである。保吉はこうした考えから、芸術を解さない栗野先生に対しては、「社会人たる威厳」を保つことで、芸術家としての矜持を保とうという発想に至るのである。

先にも触れたとおり、保吉は自己の芸術の発展のために、毎週東京へ行き文化的な娯楽や友人との食事などをすべきだと考えているが、その必然性には疑問が残る。今回栗野先生から借りた金をそのまま返すために東京行きを断念したことが、彼に多大な苦痛を与えているとは言い難く、寧ろここでは東京行きを諦めることの悲痛さよりも、栗野先生へ威厳を保つためにこの十円札を保存しなければならないという芸術家としてのプライドの方がより重要なのである。

だがこの後、印税収入を得たことで十円札の保存の必然性は一旦宙に浮いてしまう。作家の端くれである保吉は、その矜持を保つためにも、芸術を嘘に貶めて金稼ぎの道具にすることを拒む手段として、栗野先生から形式上借りた金を、未使用のまま返すという方法で対処するつもりでいた。だが借金を返してなお余りある印税を得たことで、芸術を含むあらゆる問題が鮎の塩焼き一尾と等価の話に引き下げられてしまったのである。物語はここで、印税収入という新たな要素によって保吉に一つの解決を与えたが、「ヤスケニシヨウカ」の件に潜む不安要素から、根本的な解決には至っていないことを読み取ることができる。今後も保吉がこの特定可能な紙幣を返す可能性は残っており、危険因子が完全に取り除かれた訳ではないからである。一見完璧に思われた十円札の保存という解決方法には大きな欠陥があり、印税による解決法が見出された後も、保吉の目の届かぬところで時限爆弾のように燐り続けているのである。この物語に潜む問題は、そう簡単に解決できるものではないということ、語り手は示唆している。

この十円札の返還については後日談が描かれぬまま結ばれているため、未使用だと気づかれることなく、無事栗野先生に返済できた可能性も否定できないが、物語を七八年後の世界から語る視点人物が、先述の

「朝日」の件と同様に、保吉をナポレオンに準えていることは、彼に好ましくない顛末が待ち構えていることをも想起させる。保吉はいずれの場面でも、一瞬爽快で満ち足りた心持となるが、威厳を保つために効果的と思われたその振舞いが、その後の彼自身に幸福を齎したかと問われると、聊か答えに窮する。ナポレオン自身、ここで取り上げられている二つの戦の十数年後、流刑に処せられその地で不遇の死を遂げていることから、明るい未来を暗示しているとは断定し難い。深刻な問題に直面しながらも、未解決であることに無自覚なまま安心しきっている保吉とナポレオンの姿が重ねられているようにも思われる。

なお結末における未来の暗示はこの作品のみならず、同年発表の「寒さ」<sup>⑥</sup>や「文章」<sup>⑦</sup>などの「保吉もの」にも見られる特徴である。この二作品では、作家としての保吉の未来を、明るい将来と暗い将来という、異なる行末として描いている。「十円札」においても、作家である保吉が、芸術を理解しない人々の中でどのように身を処していくのかが描かれている。冒頭において物売りを芸術家の敵と見做していた保吉は、栗野先生とのやりとりを通して、芸術家の良心を支えているものは「社会人たる威厳」であると悟る。だがその威厳を保つために考え出した方法が危うさを孕んでいることには遂に気づかぬまま、物語は幕切れとなる。そして後に起きる出来事を仄めかしながらも、最後まで描くことなく終えるという曖昧な結びは、これらの「保吉もの」に共通する部分であり、その後「少年」<sup>⑧</sup>で描かれた「何一つ碌にわからないのは寧ろ一生の幸福かも知れない」という思想にも通じていく。

だが模糊とした結末という点では共通するものの、本作と他作品にはその曖昧さに多少の違いも見受けられる。「文章」では保吉が途方に暮れているところで作品が終わるのに対し、本作での保吉は、既に問題を

解決したものとして泰然としている。だが保吉の気づいていない残された危険因子を語り手が提示して幕切れとなる。二作共に明確な決着がつかないまま終わる物語といえども、保吉のあり方については曖昧さの質が異なっており、留意すべき点であろう。

本論では「十円札」の考察のみに止めるが、今後は「保吉もの」に属する他作品との相違点についても、理解を深めていきたい。

#### 注

- (1) 一九二四（大正一三）年七月一八日発行（新潮社）
- (2) 一九二五（大正一四）年一月一日発行『東京日日新聞』掲載。
- (3) 一九三〇（昭和五）年一月一五日発行（岩波書店）
- (4) 大西永昭「十円札」と作家の〈威厳〉——芥川龍之介「十圓札」試論——『語文と教育』第27号、鳴門教育大学国語教育学会、平成25年8月
- (5) 一九二三（大正一二）年一〇月一日発行『女性』第四卷第四号に「お時宜」の題で掲載。のち『黄雀風』所収にあたり「お時儀」に改題された。作品構造については拙稿「芥川龍之介「お時儀」論——「薄明るい憂鬱」に漂う曖昧さ——」（『言語・文学研究論集』第14号、白百合女子大学言語・文学研究センター、平成26年3月）参照。
- (6) 一九二四（大正一三）年四月一日発行『改造』第六卷第四号掲載。のち『黄雀風』および『芥川龍之介集』所収。
- (7) 一九二四（大正一三）年四月一日発行『女性』第五卷第四号（四月特別号）掲載。のち『黄雀風』所収。
- (8) 一九二四（大正一三）年四月一日発行『中央公論』第三九年第四号（春季大付録号）に「一 クリスマス」「二 道の上の秘密」「三 死」掲載。同年五月一日発行の同誌第三九年第五号に「少年続編」として「一 海」「二 幻燈」「三 お母さん」掲載。『黄雀風』所収にあたり、「少年」と「少年続編」の章番号を「四」「六」に改めたものを併せて一つの作品とした。

\* 本稿での「十円札」の引用はすべて『芥川龍之介全集 第十一卷』（岩波書店、平成8年）に拠った。